

紋章学の応用によるコーポレートアイデンティティの提案

The Modern Usage of Applied Heraldry

石塚健太

指導教員 小出昌二

拓殖大学工学部 デザイン学科 視覚デザイン研究室

キーワード:紋章学・CI・ブランディング

1. 研究の背景と目的

昨今のロゴデザインは機能面を重要視しシンブルを追求しすぎた結果、恒常化し他と区別が付きずらくなっている。近代的なロゴデザインの問題点として似たものが多くあり情報を圧縮し無駄を省いたものは受け取る側が情報の解凍方法がわからず意図が伝わらないというものがある。例として下に示したロゴマークは参考文献より参照した(図1)。

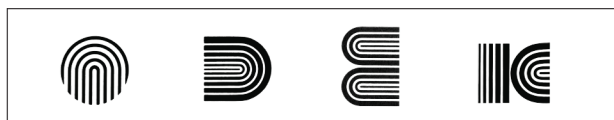


図1 似たロゴ(注1)

これからさらに似たものが増えていき飽和状態となったときに、合理的かつ他のロゴとの差別化を図ることは難しくなると考える。企業が多額の資金を投資し無駄を削ぎ落としたロゴは無機質で消費者から信頼や親しみを得るに適しているか疑問だ。Henderson and Cote(1998)が行った調査によると、シンプルなものよりも複雑なものがより好まれることを実証した。紋章の起源は、戦闘に参加している者の顔が鉄鋼製の兜で隠れている際に個人を識別する必要性にあった。紋章は歴史により体系化されており、権威を誇示するとともにその紋章、その家系、その個人にまつわる歴史を知ることができる。ロゴは、顔のない集団である組織を識別するため企業の掲げる理念や特性を視覚化したものであり、時の変化に左右されることのない普遍性、また競合企業と明確に差別化するための強い独自性を持っていることが重要だとされる。本研究は、紋章学の応用によるロゴデザインシステムの探求的研究でここに報告する。

2. 研究方法

本研究は、紋章学における紋章の作図方法と実例を研究し、ロゴデザインに転用し新しいロゴデザインシステムを構築することを方法とする。他のロゴとの差別化において紋章の形をとった精巧かつ合理的なデザインを提案する。ロゴを見ただけで所属身分情報が分かれば、ロゴ一つ載せるだけで済むことが多くなり書類の目を通すべき情報以外の情報を排除できると考える。このロゴデザインシステムを運用するにあたって現在あるロゴから組織の状況に応じて、段階的に精巧にしていく。

3. これまでの成果

Escutcheonの構成要素

- ロゴ(emblem or symbol)
 - ・チャージとして使う
- 業種
 - ・シールドの形状で区別

業種

UK SIC, US SIC, ISIC, NAICS, NACE, ANZSICの6つの主要産業コードが存在する。世界的な標準コードであるSICコードによる業種区分を用いる(図2)。

Major group division of SIC codes	
0100-0999 Agriculture, Forestry and Fishing	5000-5199 Wholesale Trade
1000-1499 Mining	5200-5999 Retail Trade
1500-1799 Construction	6000-6799 Finance, Insurance and Real Estate
1800-1999 not used	7000-8999 Services
2000-3999 Manufacturing	9100-9729 Public Administration
4000-4999 Transportation, Communications, Electric, Gas and Sanitary service	9900-9999 Nonclassifiable

図2 SICコードによる大分類

エスカッションの形状を試作した(図3)。区別が付きやすく意味を持たない形状が好ましい。

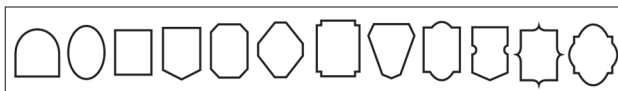


図3 エスカッションの試作

Crest

紋章において最上段に配置されるクレストは日本の家紋に似た使われ方がされる。これはロゴデザインにおいて時代の流れでロゴが変化していったもので淘汰されてしまったものを再び使いたいときに最適な場所だと考える。

Helmet

紋章においてヘルメットは王以下の各階級の紋章の区別ができるようになっている。ヘルメットの種類と向きで階級を区別されており、これをロゴデザインにおいて、一部上場企業、二部上場企業、マザーズ、非上場企業の区別に応用できると考える。上場企業企業は厳しい審査を通過しており他では得られない信用があり、あえて上場をしていない企業もあり、企業のスタンスをロゴにわかりやすく示すことができる。それぞれのヘルメットを試作した(図4)。

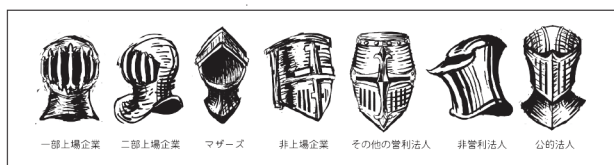


図4 ヘルメットのスケッチ

Mantling

太陽の熱で甲冑が高温になるのを防ぎ、鏑を防止しさらに敵の攻撃を受け流すことにも使われていたとされている。必ずしも全ての要素が使われるわけではない紋章において全体のバランスをとることに役に立つ。

Wreath

クレストを直接ヘルメットにつける貴族以下の紋章には必ずリースがある。リースは兜にマントを取り付ける用具でありヘルメットの上にクレストを安定させる役割がある。ロゴデザインにおいても、クレストを安定させるため使用できる。

Suporter

サポーターは楯の形状によっては左右にスペースが開くためバランスをとるために配置される。近年では企業・団体のコーポレー用することも多くサポーターとして有効に活用できると考える。

Motto

モットーは主義、主張、座右銘、金言といったもので、ロゴデザインにおいてはチャージの図形の解釈を限定する言葉を入れることで図形の意味や製作者の意図を伝えることができるようになると思う。



図5 拓殖大学ロゴスケッチ

拓殖大学を例に各要素を紋章として試作した。(図5)現在使われているロゴをチャージとして使用しサポーターには、建学の精神・理念にある「アジアへ世界へと飛ばたく」から日本から北へ飛んでいく渡り鳥である大鷹を使用しモットーにアジアへ世界へと書くことでチャージが世界へ広がっていくことへ解釈を促し電波やアンテナのような間違った解釈をされることを防ぎロゴ製作者の意図をより確実に伝えることができる。閉じたヴァイザーヘルメットは非営利法人であることを示し、拓殖大学の「未開の土地を開拓し、そこに移り住むこと」の意味の拓殖をピッケルとスコップのクレストで示した。

次の紋章(図6・左)は架空の海運企業を例にロゴデザインをした。チャージには錨をモチーフとし、サポーター・ヘルメット・クレストの要素を一つのキャラクターで示した。キャラクターを使うことは現代ならではのことで、本研究において現代で紋章学を活かせることの証明となると考える。現在実在の企業のロゴを作成している。(図2・右)

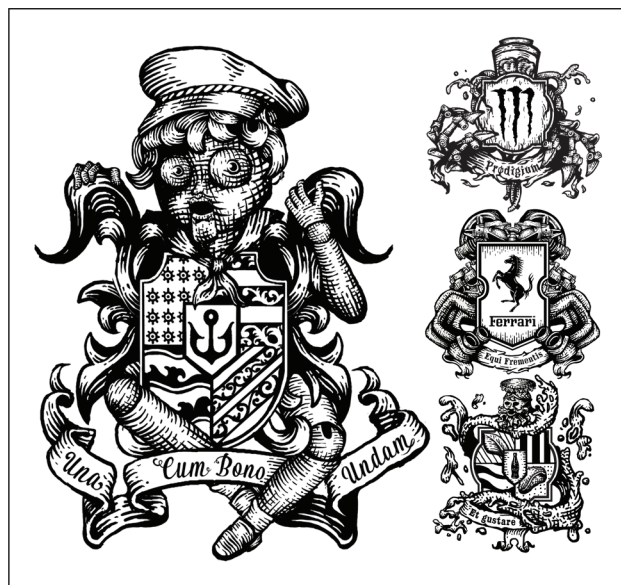


図6 作成したロゴ

参考文献

- 1) Guidelines for Selecting or Modifying Logos, Pamela W. Henderson and Joseph A. Cote, American Marketing Association, 1998(注1)
- 2) TRADEMARKS & SYMBOLS volume 1 alphabetical designs, Yasaburo Kuwayama, Van Nostrand Reinhold, 1973
- 3) Heraldic design : its origins, ancient forms and modern usage, Hubert Allcock, Tudor Pub. Co., 1962
- 4) ヨーロッパの紋章-紋章学入門- シリーズ 紋章の世界 1, 森 護, 河出書房社, 1996